断章
旭川のアイヌ語地名研究 ㊶
高橋 基

前回の内大部川から、順次、石狩川を上流に向かいアイヌ語地名を見ていくこととし、今回は、神居古潭の直前までを概観する。

掲載図は、明治三十年製版の『北海道仮製五万分一図』で、鉄道が敷設される前の測図である。左岸の「神居古潭駅」は、駅逓の宿舎のこと(現・神納橋)は、現在の道道五十七号・旭川深川線の位置で、当時は渡船である。掲載図の石狩川の右岸の⑤の位置までは、当時も空知郡で、現在は深川市域である。

明治二十四年に永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』で、前回の内大部川の対岸付近から上川郡と認識していたようで、石狩川の右岸の上川郡の最初に、下流から上流に向けて、次の三つのアイヌ語地名解を書いている(掲載図の番号と照合ください)。

―神納橋から神居古潭まで(上)―

①エンベウシ(enbe-ushi矢笥ある処)―ラシユパ(方言サビタの木)にて作る矢を「エンベ」と云ふ。兎狐を射るに適す。

②ヤソンパラ(yasoshi-para広き網漁場)―石狩川の広き網漁場へ注入する川なれば名づく。

③シトクラ(shit-kura機弓)

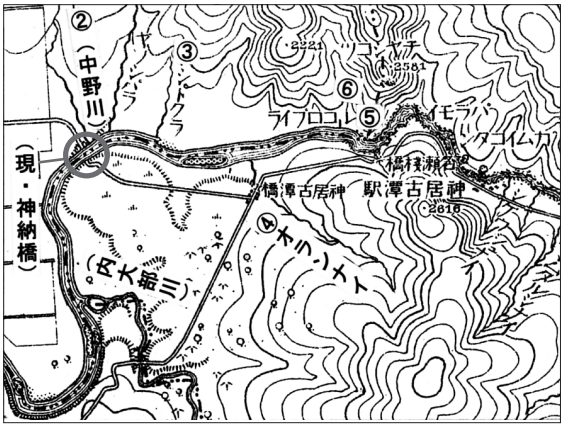
①のエンベウシは、掲載図外なので記載せず、②のヤソンパラは、深川市納内町の資料で、現・中野川と判明した。神納橋上流の石狩川の広い直線コースで、鮭漁などをしたのであろう。そこへ流入する川である。③のシトクラは、仕掛け弓を置く川の意味であろうが、知里真志保も山田秀三も不詳としている。現称のアモイ川の由来も不明である。

さて、左岸では、北海道指定文化財の神居古潭縦穴住居遺跡の上流側に流れているのが、④「オランナイ(o-ran-nai川尻の水落る川)―川尻の水、本川(註・石狩川)へ落ち下るに因り名づく。橋あり、カムイコタンハシとあれども、此の処カムイコタンにあらず」と永田方正が書いたが、知里真志保は、「オランナイ(o-ram-nai川尻・低い・沢)―川尻がぐっと低くなって石狩川に注いでいるのでこの名がある」と地名解。現地から知里説が妥当である。

次に、永田方正は、石狩川の川中の激流を、⑤「カムイウッカ(kamui-utka神瀬)―川の中央に大岩あり。水激して奔湍する処」と記した。松浦武四郎も丸木舟で遡上時、「雷吼をなすさま、如何にもおそろしくなったり」と書き、⑥「ウッカヤオマナイ(utka-ya-omanay瀬の・岸・にある・川)」(現称・神居沢川)と貴重な記録も残した。

ところが、このカムイウッカは、掲載図では、⑤「レーコロプイラ」と誤って書かれ、かつ、左岸には「名瀬桟橋」と橋名まで記載している。実は、レーコロプイラは、文化四年(一八〇七年)、近藤重蔵が乗っていた丸木舟が転覆破船し、百間(約百八十メートル)ほど流され、御朱印まで塗らしたという、有名なエピソードのある激流の難所で、ハルシナイ(春志内)から二キロメートルも上流にある。

このレーコロプイラについて、永田方正は、「レイコロプイラ(re-koro-puira有名の激湍―此の崖に桟道あり。名瀬の桟と名づくるも可なるべし」と地名解。この文言から、石狩川の激流の様子と桟道の状況が同じところから、カムイウッカ―レーコロプイラと誤解して、「名瀬桟橋」まで記載したのである。

次回は、その桟橋にあたる神居古潭大橋やカムイウッカの様子を写真でお見せしたい。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します